網走
流氷とハマナスと番外地と

巖谷　國士 Iwaya　Kunio

1943年東京生まれ。東京大学出身。仏文学者・評論家・作家・写真家・明治学院大学名誉教授。シュルレアリスムの研究と実践を軸に、芸術・文化の広い領域にわたって執筆活動を展開。講演や展覧会監修、内外の紀行でも知られ、北海道との縁も深い。著書に『シュルレアリスムとは何か』ほか多数、近著に『澁澤龍彦論コレクション』全５巻。６－７月にはまた道東の旅をした。

網走へは40年以上前に二度、夏と冬に行ったことがある。どちらかというと冬の印象のほうが強かった。1975年の１月末、年少の友人たち男女５人とともに、釧路で借りた車で道東をめぐってから網走に入った。すでに流氷に閉ざされていたオホーツク海の有様が、いまもくっきりと脳裏に残っている。

網走港や能取（のとろ）岬から眺められたのは、海面がそのまま平らに凍っているのではなく、大小さまざまな不定形の氷塊が身を寄せあって白い雪をまとい、はるか彼方までつながっている光景だった。思いきって氷上に降り立ってみると、半透明の巨大な水晶を思わせる氷塊は、かすかに動いているようだった。

そんな氷の隙間にところどころ青い海面が見え、水中には小生物の気配もあった。氷海は生きているのだ、と感じた。

流氷はオホーツク海の西北部からサハリン（樺太（からふと））経由で南下し、１月後半には北海道の東北岸にやってくる。そして春先まで海を白く閉ざしてから、ある日、一夜にして去ってゆくのだという。その前にすこしずつ溶けて氷塊同士が分離しはじめると、こすれあって音を立てる。別れの前に「泣く（鳴く）」のである。

赤ん坊の声に似ているといわれるその氷の音を、私はたしかに聞いたような気がした。

気温は－10℃以下だったろう。涙も凍る寒気のなかで、ここは日本ではない別の「くに」だと感じた。実際、一時的にせよ海が氷に閉ざされるような地域は、列島でもこの沿岸しかない。そのうえサハリンもアムール（黒龍江）河口もふくむオホーツクの広大なゾーンが、氷によってここまでつながっているという実感が芽ばえた。当時はまだ「オホーツク文化圏」の存在を知らなかったにしても。

もうひとつ、網走とその周辺のあちこちで、凍ったまま雪に覆われている水面に出会ったことも忘れがたい。東の濤沸（とうふつ）湖や藻琴（もこと）湖、市中の網走川と網走湖、西の能取湖など、このあたりで出会う湖面・川面はどこも真っ白である。さらに西のサロマ（佐呂間）湖岸まで行くと、この最大の塩湖の表面は見わたすかぎり水平の雪原だった。ごつごつした氷塊のつらなる海とは対照的な白一色の平面に体を投げだし、雪原にすっぽり沈みこむと、窪みのなかは無風で、意外に暖かかったことを憶えている。

翌日は市の中心部を歩いたけれど、人とも物ともあまり出会わなかったせいか、冬の網走の印象の大半は海と湖と川、そして氷と雪である。

いまも感じることだが、網走という都市の特徴はまず、オホーツク海岸に沿って、海・川・湖のほか潟や

入江などにも恵まれた地形だろう。６世紀に北方からモヨロ（最寄）に到来したオホーツク人や、その後のアイヌばかりでなく、古代以来この地に住んださまざまな民族は、そんな地形の恩恵に浴しつつ、冬には氷や雪と向いあう生活になじんでいたのだろう。

さいはての原生花園

他方、夏の網走はどんなだったか。たしか氷海を見た冬より２、３年前の７月に訪れたはずで、それが私にとって最初の網走だったのだが、こちらをあとまわしにしたのはほかでもない、最近あらためて夏の網走を訪れたとき、40年以上前のその旅を、いわば「完結」することができたからである。

最初は列車のひとり旅だった。町や港も散策したが、目的はむしろ北の花々を見ることだったので、まず濤沸湖岸と小清水の原生花園を歩いた。

オホーツク海とその沿岸の丘の眺めは茫漠としていた。花はぽつんぽつんと離れて咲いているだけで、当時はまださほど知られていなかったせいか、私のほかに歩く人影もなかった。ヒオウギアヤメやエゾキスゲ、クロユリなども印象が薄く、ただ、はじめて見たハマナスだけはよく憶えている。

このバラ科の植物については『幻想植物園』という著書に１章を捧げたので詳述はしないが、その姿が北の海岸に似あうことはたしかである。棘（とげ）の多い茎の先に咲く一重（ひとえ）の花びらはバラ色でも、どこか地味で寂しげに見える。あの時代ならば当然のことだが、私は思わず歌の一節を口ずさんだ。

「遥か　遥か彼方にゃ　オホーツク
　紅い　真っ紅なハマナスが
　海を見てます　泣いてます
　その名も網走番外地」

７月はじめのハマナス。この写真は「博物館　網走監獄」正面門の花壇（後述）に咲いていた花。　撮影：筆者

（三番、タカオ・カンベによる替え歌）

ご存じ映画『網走番外地』シリーズ（1965－72年）の主題歌で、主演の高倉健が朴訥（ぼくとつ）だが愁いのある声と節まわしでうたい、映画と同様、一世を風靡していた。歌詞が隠語をふくむとか反体制的だとかいうので放送禁止になり、いまではあまり聴かれないけれども、歌謡史に残る名曲だったといってよいだろう。

もとは戦前の映画『レビューの踊り子』（1931年）の主題歌で、足利龍之助（東京音楽学校教授だった橋本國彦のペンネーム）の作曲という由緒のあるものだが、のちに替え歌が生まれ、網走の番外地（地番のない国有地）にある刑務所で、囚人たちのうたう哀歌になっていた。それを前提に、新たに書かれたのがこの歌詞である。

オホーツクが「遥か彼方」だというのは、内陸の刑務所で思いうかべているからだろう。その海を見て「泣く」真っ赤なハマナスに、自身の運命を重ねあわせているところはやや通俗的だが哀切で、いちど聴いたら忘れられない。

そもそも囚人のうたう歌に、網走に多いハマナスの花を配した発想が秀逸だ。別ヴァージョンもあって、そこでは最後にハマナスが登場する。

「呼んで　呼んでみたとて　さいはての
　遠い海鳴り　風の音
　せめて真っ紅に燃えて咲く
　花になりたや　ハマナスの」

私が原生花園ではじめてハマナスを見たとき、この歌の影響（？）がなかったといえば嘘になる。風景に「さいはて」を感じて、いっときハマナスの花にわが身を重ねた。もしかすると銀幕上の健さんの気分になり、肩をいからせて黙々と歩いたかもしれない。

当然のように、番外地へ行ってみたくなった。まだ受刑者のいた時代だが、映画の大ヒットで観光客がふえたと聞いていたので、三眺（さんちょう）地区まで足をのばした。

「鏡橋」をわたって敷地に入り、特徴のある正門のアーチの前に立ったのはたしかだが、なぜかその先を憶えていない。閉ざされていたのだろうか。そんな記憶の欠落が長いこと気になっていて、最近、取材で網

日本音楽著作権協会（出）許諾第1810860-801号

走へ行ったとき、再訪することにしたのだった。

人形たちの番外地

コンクリート造になった「鏡橋」からは、睡蓮の咲きそろう川面が見おろされ、現・網走監獄のアプローチは意外に晴れやかである。そのまま進むとあの赤煉瓦の正門があって、門衛が立っているので一瞬ひるんだが、じつはリアルな人形であるとわかり、今回は無事に入ることができた。

驚いたのは正門に向う道に花壇ができていて、なんとハマナスの株が並んでいたことである。手入れのよい植木の花は鮮やかなバラ色で、寂しいどころか華やかにも見える。どこか都市公園のような明るい光景。

網走刑務所は1983年に「博物館　網走監獄」となり、整備を重ねて今日にいたっている。明治以来の建造物の数々が元のまま、あるいは移築されて広い敷地内に保存されているので、いまでは明治村にも通じる野外ミュージアムなのだ。

庭園の要素も加味されていて、ハマナスばかりか色とりどりの宿根草の花壇や、人工滝を配した水路などもあるし、先住民族の女神ニポポの像が立っていたりもする。子どもづれの客も多いようで、一種のテーマパークといえなくもない。

正門奥の「庁舎」は1912（大正元）年再建の立派な木造西洋館で、左右対称の平屋造、水色の枠に淡いピンクの下見張りの外壁だが、内部は資料展示室になっている。1890（明治23）年、道東開拓のための「中央道路」の起点として網走に外役所が置かれ、1903年に監獄に昇格したものだが、囚人たちの労役でその中央道路の建設（全長228キロのうち北見峠まで150キロ！）や硫黄山の採掘など、数々の事業を進めていった過程を、写真・図解つきで解説している。苛酷な労役によって開発が進む一方で、多くの囚人が死んでいったこともわかる。

「国家」の残酷さを伝える展示から陰気なムードが漂いもするが、奥に大規模な売店のあるところはいかにも観光名所である。壁に映画『網走番外地』シリーズだけでなく人気漫画『ゴールデンカムイ』のポスターも貼られ、後者の関連グッズがユーモアを添える。監獄というものにはどこか喜劇的なところがあるようで、『網走番外地』のコミカルな場面も思いうかぶ。土産品では「祝出所」と刻印された熨斗つきのクッキーなども笑いを誘う。

所内には正門を起点にして、計22箇所をめぐる順路ができている。どこも興味ぶかい。私は２時間ほどかけてひとつひとつ見ていった。

そのすべてを語ることはできないが、順路にそって「職員官舎」「釧路地方裁判所網走支部法廷復原棟」「味噌醤油蔵」「休泊所」「漬物庫」「監獄歴史館」「二見ヶ岡刑務支所」「浴場」「独居房」「教誨堂」など、それに野外の農場が記憶にのこる。

だが最大の見ものはやはり「放射状舎房」だった。５棟の細長い翼棟が扇形にまっすぐ伸びている幾何学的構造がまず目を奪う。５棟それぞれに一直線の長い廊下があり、その両側に囚人房が並んでいる。廊下の高い天井と天窓のデザインが美しい。囚人の生活はともあれ、住処自体はみごとに合理的である。

放射状に伸びる廊下の起点には「中央見張所」があって、まさにパノプティコン（全方位監視）を実現している。規則正しい直線ばかりの空間に配置されている囚人房といい、厳格な管理・監視のシステムといい、近代の監獄というものは一種の疑似ユートピアではないのか、という逆説がふと思いうかんだ。

この「舎房」もそうだが、多くの建物に囚人と看守の人形が置かれていて、とくに要所は小演劇の舞台さながらである。翼棟ではたとえば、扉のあいた部屋をふとのぞくと、囚人たちが坐って食事をしていて、一瞬ぎょっとしたりする。

人形の顔つきや仕草が妙にリアルなせいもあるだろう。人形は人間に似ていればいるだけこわいものだ。

監獄の「浴場」の人形たち。人形制作者は刺青にも力を注いでいる。　撮影：筆者

囚人の人形はさほど「人間そっくり」ではないにしても、それぞれ違う顔にできている。その顔がどれを見てもいわゆる「凶悪」で、多様性に乏しいことが残念、というか、おもしろくもある。制作者が観客側の先入観に合わせようとしたのだろうか。

看守の人形のほうはだいたい無個性・無表情にできていて、白い制帽・制服で直立しているため、各人各様の動作をしている囚人のほうに目が行く。全員が同じ派手なオレンジ色の囚人服を着ているのでなおさらだ。思わず見入ってしまう個性派もたまにいる。

所内に動員されている人形の数は優に百の単位だろう。野外労役用の「休泊所」には十数人が寝起きしているし、馬の人形もいる農場や、「二見ヶ岡刑務支所」の広間では数十人が作業をしている。その奥の便所のガラス窓から、いま用をたしている男のこわい顔が見えたりする。

異色なのは「浴場」の人形たちで、当然ながら全員が裸体で背を向けているが、凝った刺青（いれずみ）の男もいる。人形制作者が遊びで腕をふるったのかもしれない。

このように「網走監獄」はさまざまな見方のできる「博物館」で、多少やりすぎの感のある人形たちの演出にも、一種のアートと見てよい側面があるだろう。ともあれ私は望外の充実感をもって「出所」し、正門に近い「監獄食堂」で特製「監獄食」を食べ、町なかの宿へ戻ったのだった。

郷土博物館の魅力

思わず番外地に紙数を割いてしまったが、近代の網走の発展がこの刑務所の事業と結びついていた以上、やむをえないことだろう。としても、それまでの歴史はどうだったのか。その点では川向うのモヨロ貝塚とその博物館、さらに南郊の天都山にある北方民族博物館が重要な意味をもつが、それらについては別の雑誌に先約があるので、ここでは触れないでおく。

ただ、網走という特異な都市ないし「くに＝郷土」の自然と、古代から近・現代にいたる歴史とを概観できる好個の施設として、「網走市立郷土博物館」があることは付記しておきたい。

中心部に近く、アイヌのチャシ（砦）跡の残る桂ヶ岡の上に、1936（昭和11）年、あのフランク・ロイド・ライトの弟子だった田上義也（たのうえよしや）の設計になる瀟洒（しょうしゃ）な建物が立っている。左右対称の西洋館だが小さめで、威圧的なところがまったくない。赤いドームといいピンクのタイル張りの半円柱といい、色や形に遊び心があって、見ようによっては大きな玩具のような「かわいい」博物館である。

内部もいい。ほどよく配置された正方形の窓や展示ケースの親密さ、幾何学模様のステンドグラスのある踊り場や、２階からのぼる螺旋階段の優美さなど、建物だけを見ても魅力的だが、さりげない展示内容にも心ひかれるものがある。

１階は郷土の自然、２階は太古から現代にいたる歴史。氷海と森林に生きる獣たち・小生物たちの剥製や標本が勢ぞろいしているかと思えば、縄文人やオホーツク人の頭蓋骨、アイヌの住居のジオラマ、開拓民の農具・漁具・猟具や家具・遊び道具まで並んでいる。点数が多くないだけ、凝縮されたミクロコスモス（小宇宙）を感じさせる。

そこを出てから、市の中心部を歩き、ニポポ像のほかにほとんど人影を見ない商店街を抜けて、川沿いに放置された鯨漁船の残骸を眺め、網走港までたどりついた。「流氷まつり」の会場あたりに来たのだが、いまは人影がない。市街から帽子岩までひろがるパノラマが寂しくも懐かしかった。

正面の灯台の側面に色あざやなマークが描かれているようなので近づくと、それは氷海に棲むかわいい小生物クリオネの図だった。網走のシンボルらしいこのマークを見て、なにがなし温かな気分になった。

「網走市立郷土博物館」の瀟洒（しょうしゃ）でかわいい建物。1936年造、田上義也（たのうえよしや）の設計による名建築。　撮影：筆者